

# 新たに蘇る梶井基次郎の世界！

新編集・決定版

小説・評論・隨筆・草稿・ノート・書簡 全三卷 別巻一

筑摩書房

# 梶井基次郎全集

倦怠アンニュイという負の力 杉本秀太郎

二十歳に達するよりも前に心を惹かれた書物のことはいつまでも忘れない。いや、忘れないといつては正確を欠く。忘れてしまいたいことを経験させないような青春は、過去百三十年にわたって日本にはあり得なかつた。私には梶井基次郎の作品を忘れないと思っていた時期があり、そして忘れ果てたがごとき装いの下で経過したのはそれよりもずっと長い歳月だつた。

去年の冬、幾十年振りに『檸檬』以下、生前に発表された作品を読み返して、この人の感化をいかに深く蒙っていたかに気づいた。目ならびに耳を意志して用いること、言葉を研ぐこと、基次郎にまなんだ。ラフォルグにもまんだ。この短命なふた基の文学をつらぬいているのは倦怠アンニュイという強い負の力である。

〔冬の日〕

白日下の闇 古井由吉

われわれは喧噪の中に生きる。喧噪はわれわれの内にまで及び、感覺と思考を乱し、狂わせ、衰えさせる。脱れ難い。これをしばしでも拭い去ってくれる鎮静のたよりはないものか、としきりに求める者は、あらためて梶井基次郎を読むとよい。作品の内部に一步踏み込めばたちまち視覚が、聴覚が、もろもろの感覺が冴える。盲者のように目を凝らし、聾者のように耳を澄ます、という生命の緊張を知らされる。刻々の危機に作品は満たされる。闇というものを、読者は知らされる。さらに、白日下に闇を見る。さらにまた、闇の内に白日を感じるという体験をさせられる。梶井基次郎にあっては、感興はすなわち深淵である。見ること、聞くということは、すなわち生死のことだ。

——冷静といふものは無感動ぢやなくて、俺にとつては感動だ。

## 慈愛と狂気

大庭みな子

## 純粹な心のままに

安野光雅

梶井基次郎といえば「檸檬」といわれるその代表作はわずか十数枚の短文である。「檸檬」は生命の中に秘められた爆発するエネルギーを表現する力強さで、大正末期の文学世界の中で屹立している。アメリカ人は取るに足らないつまらないものを指して「あれはレモンだ」という言い方をするが、その取るに足らないつまらないものの内側に燃えている生命の炎と不吉なまでの爆発力を予感するのが梶井の文学である。それは原爆にすら喻えられるであろう。わたしは唐突なことにも梶井の檸檬に重ねて二つの場面を思い浮かべる。潮干狩りに行つた少年が取つた蛤を自分のはいている海水パンツの中に入れ大切なものを挟まれたと嘆くのを聞く母親の慈愛に溢れた目と、唸り声を上げるライオンのそばに這い寄る我が子を走り寄つて抱き上げる母親の狂気である。梶井は生命の不気味さを静物——瓶や壺の間に転がされた檸檬の中に透視する作家である。

「私が好きだったのは」という書き出しの文章にであった。「戯画、門扉の上の唐草飾り、舞台の背景画、大道芸人が捌くスケーフ、店の絵看板、俗っぽい商標（：）」梶井基次郎も言う。「汚い洗濯物が干してあつたり、がらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。」「鯛や花を打ち出してあるおはじき（：）南京玉（：）」「あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。」（「檸檬」）

思うにこの言葉は、権威を知らず、なんの先入観も持たず、純粹な心のままに世界を見ることのできた、すばらしい幼児期の記憶にちがいない。だから梶井基次郎の本は読む度に新しい。いや、彼に限らず一般に、いわゆる教養も、価値観も、すべてはあのよき時代の感性が軸になつてているのだと、わたしは彼の本によつて思い返す。

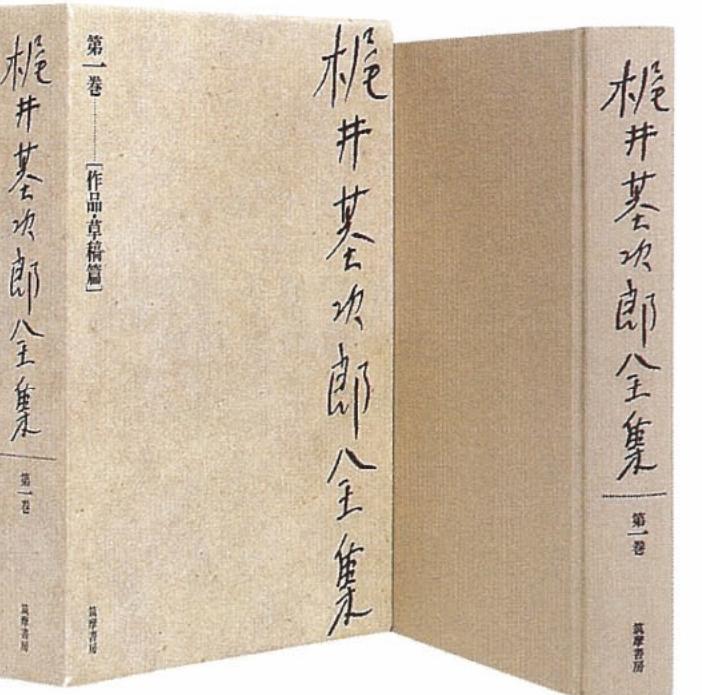
冒頭に掲げたのは、「訳詩集・シテールへの旅」（井上究一郎）の中のランボーの言葉である。ランボーと梶井と願わくは読者とが、詩のように美しいあの記憶の世界に通底することができればと願い、この全集を推薦する。

第1回発売……1999年11月12日  
第1巻[作品・草稿編] 定価(本体価格5800円+税)  
第2回発売……1999年12月11日  
第2巻[草稿・ノート編] 定価(本体価格5800円+税)

●A5判 上製貼函入 正字旧仮名使用 各巻平均608ページ 毎月刊行  
●本文13Q1段組(作品・草稿)/12Q1段組(ノート)/12Q2段組(書簡)

### [特色]

- 全く新しい編集方針で纏められた決定版全集
- 作品・草稿類に施された厳密な校訂
- 草稿・ノート類の全般を如実に復元、成立年代を再考証し作品の創作過程に迫る
- 近年の研究成果を盛り込み、ノート・書簡の註を大幅に増補
- 年譜・書誌・回想など充実した別巻を新たに編集
- 同時代評や肉親・友人知己の回想を集録、詳細な人名索引を付す
- 正字旧仮名使用。草稿・ノート編は著者の筆跡復元のため、随所に新字体を使用



[ご注文・お問い合わせは、下記の小社サービスセンターへ]

筑摩書房 〒331-8507 大宮市櫛引町2-604  
電話番号 048(651)0053

99.9.Kinmei 10

## 梶井基次郎全集

全3巻・別巻1 申込みます

お申し込み書店▶

お名前▶

ご住所・お電話番号▶

# 編集にあたつて

鈴木貞美

梶井基次郎全集が四十年振りに刷新される。

埋もれていた数かずの草稿や断片を翻刻し、執筆年代をすべて推定しなおし、作品の校訂をあらたにし、要するに編集を改めた。

作業を進めながら、そのただならぬ力にあらためて感じ入った。

ふたたび三たび、襟を正したくなる態のものである。

ディテールにわたればわたるほど心に食い入る魅力を読者に届けたい一心で、

たとえ愚直にすぎようと、誰に恥じるところのない二十余年の研鑽のすべてを、注ぎ込んだ。

ここに新しい梶井基次郎全集が出現する。まったく古びていない。

それどころか日本の、いや、世界の現代文芸の古典として、いよいよ底光りを増している。

現代人の『生』のありようを、すなわち今日の文芸を鋭く撃ち、

そして、新たな小説や批評の展開を促すだろう。

## 第一卷 「作品・草稿編」

小説

檜櫻

城のある町にて

泥澤

路上

過去

雪後

ある心の風景

Kの昇天——或はKの溺死

冬の日

桜の樹の下には

器楽的幻覚

算の話

蒼穹

冬の蟻

ある崖上の感情

愛撫

闇の絵巻

交尾

のんきな患者

評論・隨筆

『新潮』十月新人号小説評

「亞」の回想

浅見淵君に就いて

『戦旗』『文藝戦線』七月号創作評

『青空』のことなど

詩集『戦争』

「親近」と「拒絶」

「青空」記事

後援会 其他

編輯後記(大正十五年三月号)

編輯後記(大正十五年四月号)

青空同人印象記(大正十五年六月号)

編輯後記(大正十五年九月号)

「青空語」に寄せて(昭和二年月号)

編輯後記(昭和二年月号)

習作 奎吉

矛盾の様な真実

太郎と街	第一卷 「草稿・ノート編」	第一卷 「書簡編」
橡の花——或る私信	小説草稿(一)	書簡
川端康成第四短篇集「心中」を 主題とするヴァリエイション	「カツフエー・ラーヴェン」	大正八年
中学時代作文	断片群	大正九年
作文・詩・戯曲草稿	「瀬戸内海の夜」	大正十年
秋の曙	夕凧橋の狸	大正十一年
詩草稿	「貧しい生活より」	大正十二年
秘やかな楽しみ	「犬を売る露店」	大正十三年
河岸(一幕)草稿	「瀬戸の話」	大正十四年
断片1—4	「檜山の話」	大正十五年・昭和元年
攀ぢ登る男(一幕)	「夕焼雲」	昭和二年
異稿	私信	昭和四年
凱歌(一幕)断片	閻の書	昭和五年
「永劫回帰」	「夕焼雲」	昭和六年
裸像を盗む男	栗鼠は籠にはいつてゐる	昭和七年
不幸	奇妙な手品師	昭和八年
草稿1	「茶」	昭和九年
草稿2	琴をもつた乞食と舞踏人形	昭和十年
帰宅前後	「交尾その三」草稿	昭和十一年
卑怯者	「琴」	昭和十二年
断片群	「青空」細目	昭和十三年
彷徨	参考資料	昭和十四年
草稿1	看護日記——梶井ひさ	昭和十五年
草稿2	同時代批評とエッセイ	昭和十六年
彷徨の部 発展	「作品」梶井基次郎追悼	昭和十七年
大蒜	六蜂書房版全集内容見本	昭和十八年
水滸伝	「評論」梶井基次郎特集	昭和十九年
ノート	回想の梶井基次郎	昭和二十年
第一帖	日記・書簡人名索引	昭和二十一年
第二帖	年譜	昭和二十二年
第三帖	全集・月報・拾遺	昭和二十三年
第四帖	書誌・参考文献	昭和二十四年
第五帖		昭和二十五年
第六帖		昭和二十六年
第七帖		昭和二十七年
第八帖		昭和二十八年
第九帖		昭和二十九年
第十帖		昭和三十一年
第十一帖		昭和三十二年
第十二帖		昭和三十三年
第十三帖		昭和三四年
第十四帖		昭和三五年
第十五帖		昭和三六年
第十六帖		昭和三七年

## 別巻 「研究編」

参考資料

「青空」細目

看護日記——梶井ひさ

同時代批評とエッセイ

「作品」梶井基次郎追悼

六蜂書房版全集内容見本

「評論」梶井基次郎特集

回想の梶井基次郎

日記・書簡人名索引

年譜

全集・月報・拾遺

書誌・参考文献

写真は大正13~14年頃の梶井基次郎

